

幼児語について

—— 来日5ヶ月間の3才児と4才児の言語生活 ——

豊島 洋子

第I章 調査・研究について

本調査は、母国語をある程度習得した幼児が急に、外国語の環境の中に置かれ、そこで生きてゆかなくてはいけなくなった場合、その外国語がどのように習得されていくか、つまり子供の言語生活がどのように変わっていくかを、明らかにしようと試みたものである。

以上の目的を持って、E児とI児を調査対象児に選定した。

E児とI児は、英国のマンチェスターで生まれ、1970年8月まで育ち、同年9月に両親と共に来日し、現代広島市近郊に住む。父親は、日本の大学で、1970年9月より英文学の講師をしている。広島に来るとすぐ姉妹とも、家の近くの幼稚園に入園する。この幼稚園には、この2人を除いて外国人はいない。また彼女らは、日本に来る前も後も特別に日本語を習っていない。

調査対象児の生年月日

E児 1967年5月24日

I児 1966年4月 1日

調査期間

1970年9月28日 ～ 1971年1月26日

E児 3才4ヶ月 ～ 3才 8ヶ月

I児 4才5ヶ月 ～ 4才10ヶ月

調査方法

姉妹の家の書斎で、毎週日曜日1時間、遊びながら筆者との対話を録音し、それを文字化したものを資料とする。

第II章 E児の言語生活の発達

第1節 概 要

E児の5ヶ月間の言語生活の経過をたどってみると、次の4期にわけることができる。

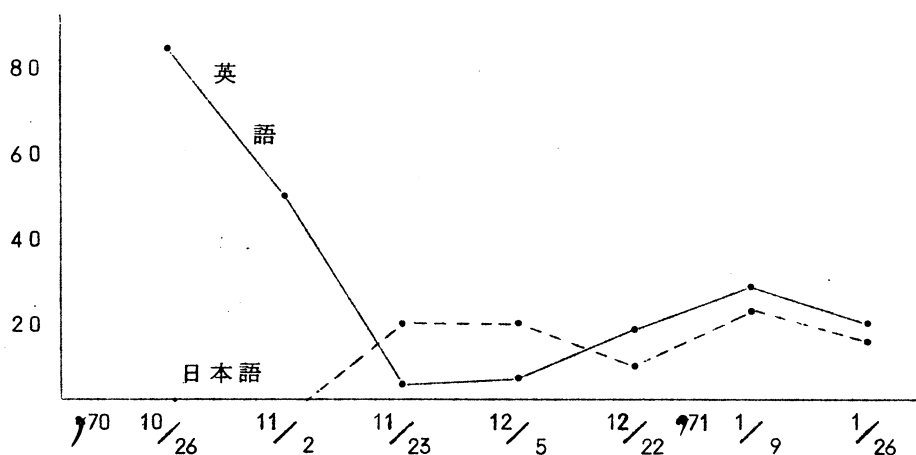
第1期は、11月半ば位までで、日本語は全くあられなく、英語表現が量的にも質的にも退行していく時期である。質的退行とは、複文から単文へ疑問表現の減少などである。

第2期は、11月の終わりから12月の終わりぐらいまでで、間投詞（アラ）禁止語（ダメヨ）接尾辞（～ Chan, ～ San）が多くあられなく、E児の表現全体から受ける感じが日本語的となる。

第3期は、12月の終わりから1月の初めまでで、幼稚園が休みになり、E児の発話がなくなった。

第4期は、1月の初めから終わりまでで、第2期に多くあられた、間投詞や擬音語がほとんど姿を消し、要求表現が英語の命令形と、ココという日本語の場所副詞で表現されたことと、様態語（ナイ、イタイ＜痛い＞）が表われたことが、この期の特徴である。

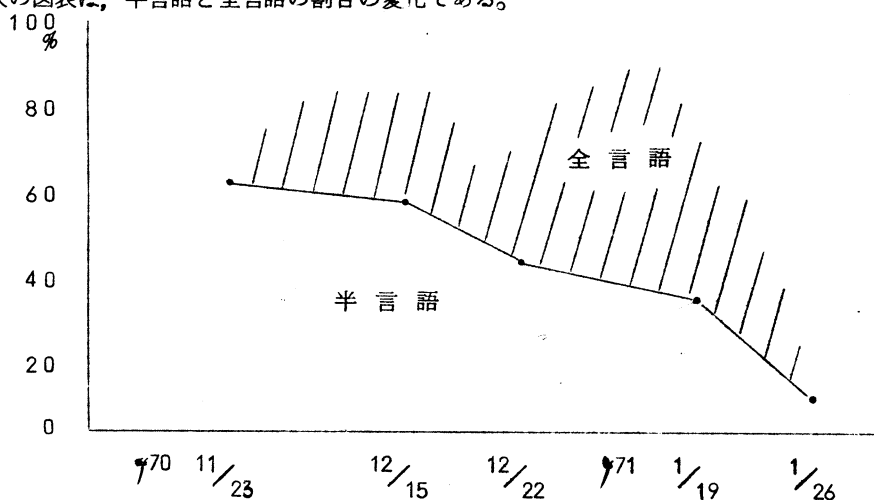
次のグラフは、発話量の変化である。



第2節 日本語の発達（音から機能語へ）

音とは、「アレ」とか、擬音語、掛け声、模倣表現を含み、筆者は、これを半言語と名付ける。
機能語とは、要求表現と説明表現で、筆者はこれを全言語と名付ける。

次の図表は、半言語と全言語の割合の変化である。



この図をみると、日を追って半言語が減少し全言語が増大していくことがわかる。

第3節 日本語表現と英語表現の比較

名詞・動詞といった文の幹になるものは、英語表現が多く、様態表現や応答表現は、日本語が多い。

第4節 英語と日本語の混交表現

日本語構文の中に英語の単語を使う。

tail ここね。

ぽく baby よ。

baby ちゃん ここね。

'71 1/19
1/19
1/26 etc.

「ここ」 + 英語

ここ open .

you ここ .

ここ ouch .

'71 1/26
1/19
1/19 etc.

英語の単語に接尾辞又は文末詞をつける。

baby ちゃん。

● eddy ちゃん。

one ね。

'71 1/19
1/19
1/26 etc.

第Ⅲ章 I 児の言語生活の発達

1月12日までは、数と色と動物の名前を言う以外は、アッアと強く笑うのみであった。

1月19日から、なんとか筆者との対話がはじまった。

I 児と比較して気付いたことは、E 児が全体として、又音として言語をまず捕えているのに対して、I 児は音も一音一音捕えようとし、意味をもったものとして日本語を捕えていることがわかる。

その他気づいたことは、I 児は文字に非常に興味をもっているが、E 児は全くもっていないことである。

参考文献

矢田部 達郎 著

大久保 愛 著

村田 孝次 著

早川 勝広 著



児童の言語

幼児言語の発達

幼児の言語発達

幼児の言語発達

比叡書房

東京堂出版

培風館

等

女性語について

(文末表現を中心として)

増田 和子

(序論) 女性語に対する考え方に ~~二つ~~ 2つあって、1つは女性語を女性の用いる言葉の中で男性と違った単語のみに限ろうとする見方であり、他の1つは、女性の用いる言葉全体について言おうとする考え方である。しかし、ここでは、女性語を後者のように女性の用いる言葉全体であ